

IV 国際交流

国際交流

中村 哲 岩本由美 大塚 文 佐々木秀美

本年度はドイツカトリック大学（KatHO-NRW）との第4回目に相当する教育交流会の実施及びMOUを新訂したパーペチュアルヘルプ大学（PHU）との語学研修短期留学支援に関わる活動支援を主とした。後者のPHUとの語学研修は2019年末から始まったフィリピン国内の火山噴火と新型コロナウイルスの流行により中止となった。この経緯に関連したフィリピン国内での当時の状況と一委員の同国内での研究活動の一端についてこの報告文に追加した。

1. ドイツカトリック大学との全学教育交流会の実施

2019年度国際交流センター事業計画に沿い、昨年度MOUを締結したドイツカトリック大学（KatHO-NRW）と5月27日（月）-28日（火）に第4回目の教育交流事業を大学院看護学研究科と共催し実施した。カトリック大の訪問団は引率の教員2名（Prof. Dr. Tanja HOFF及びDr. Ulrike KUHN）と福祉学専攻の学部学生5名（Ms. Mara BENNER及びMs. Sabrina GOLDYSZEWICZ, Ms. Ruth KAMINSKI, Mr. Vincent WICKERT, Ms. Maren SCHAEFER）、同修士学生3名（Mr. Benedict LIEFFERTZ, Ms. Stefanie NESSELER, Ms. LauraZ ANDER,）の計10名で構成されていた。

5月27日午前中に訪問団は看護学部教員4名と呉市立南特別支援学校を訪問し同校の学童・生徒と交流した。午後は委員会実施プログラムに従い、恒例の昼食会を経て副学長坂越正樹教授による開催の挨拶と祝辞の後、午後1時半から4時半までの3時間にわたってKatHO-NRWのタニヤ ホフ教授による講演「Stereotype images of care-take professionals responsible to socially vulnerable groups」と学芸学部の眞田 敏教授による講演「発達障害をともしょう子どもの学校生活上の困難と支援」が行われた。前半のホフ教授の講演は本学部委員の岩本によって同時通訳が行われた。また後半の眞田教授の講演は邦文資料と英文のスライドとで通訳なしに行われ、流ちょうなドイツ語を交えた口演であった。この講演会場には本学大学院学生および学部学生、教員の他、島根県立大学、呉市南特別支援学校からの参加者を含む約30名が参加し、副学長も交えた活発な討論が行われた（次頁写真1-4参照）。

翌5月28日午前中に、KatHO-NRW訪問団は看護学部教員2名とボランティア通訳2名（広島文化学園大学名誉教授とその友人）と公益財団法人広島原爆被爆者援護事業団のひとつである広島爆養護ホーム 倉掛のぞみ園（広島市安佐北区倉掛）を表敬訪問した。そこでは英語による概要説明、被爆された入園者の方々との交流、施設見学を行った。昨年に引き続き、2回目の訪問であった。訪問団はドイツの歌を合唱して敬意を表した。その後、正午過ぎ、現地で散会した（次頁写真5-6参照）。本報告会は中国新聞呉支社により取材され広報された（写真7）。また添付の図1は本講演会のポスターである。



写真1. 坂越正樹副学長のはじめの挨拶



写真2. 眞田 敏教授による講演



写真3. タニヤ ホフ教授による講演



写真4. 講会終了後の集合写真



写真5. 被爆者の方との対話



写真6. 倉掛むつみ園集合写真

2019年5月28日(火) 中国新聞(呉版)
 5/27 ドイツの学生に手話指導・講演会
 呉南特別支援学校 児童生徒10人交流
 ドイツ カトリック応用科学大学
 広島文化学園大学 看護学部



写真 7. 中国新聞記事



図 1. ドイツカトリック大学との全学教育交流会ポスター

2. フィリピン PHU との語学研修短期留学への支援

本年度年 8 月にフィリピンの Perpetual Help University (PHU) との MOU が新訂され国際交流センターの企画により同大学での海外短期留学プログラムが全学を対象として実施される運びとなった。看護学部は PHU と 2006 年度からこれまでの公的・大学間交流において短期語学研修を隔年ごとに実施してきた経緯から、本プログラム(2月23日から3月7日までの2週間)の実施に関し、参加学生の募集活動及び留学安全マニュアルの整備等の支援活動を積極的に行った。その結果本学部学生 6 名およびスポーツ健康学部学生 1 名の計 7 名の参加が得られることとなった。残念ながら、本研修はフィリピン国内のタール火山噴火(2019 年 1 月 12 日)および新型コロナウイルスの流行(後述)による罹災を避けるために直前に中止することとなった。

3. フィリピン共和国国内の首都圏およびレイテ州の 2019 年 2 月上旬の状況

本報告の筆者の一人である中村は PHU での語学研修プログラム実施に先立ち、科研費(課題番号 19K10588)による調査で 2 月 8 日から 17 日までの 10 日間マニラ首都圏とレイテ島に滞在した。フィリピン保健省(Department of Health:DOH)の 2 月 17 日迄の報告(<https://www.doh.gov.ph/2019-nCov>)によると、2 月上旬までのフィリピン共和国での新型コロナウイルス病(COVID-19)感染確定者は 3 名で、以下のような状況であった。最初の症例は、1 月 21 日に香港からマニラにきた武漢出身の 38 歳の中国人女性(軽い咳以外は無症状)で、1 月 30 日に新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)感染が確認されサン ラザロ病院感染症病棟(写真 1)に隔離された。その後 2 月 8 日に退院(帰国?)した。2 番目の症例は最初の症例の夫で 44 歳の中国人男性。隔離入院後、2 月 1 日に死亡し、2 月 2 日に感染が確認された。この症例は、中国以

外で最初の死亡例であった。3 番目の症例は、1 月 20 日に香港からセブ経由でボホール島に来た中国人女性であった。発熱と鼻炎を起こし患者疑いで同島の私立病院に隔離された。1 月 31 日に回復した患者は、中国に帰国した。その後 1 月 23 日のサンプルを 2 月 3 日に検査した結果、SARS-CoV-2 陽性と確認された。また、2 月 17 日までの DOH の報告によれば、この COVID-19 感染疑い症例に関してフィリピン全土で、合計 135 が隔離中であった。この時点まで感染が確認された 1 人が死亡した（前述）。マニラ首都圏では 94 人を隔離中であった。また本学語学研修プログラム実施先の PHU があるカラバルソン地域では 19 人を隔離中であった。

フィリピン現地調査に関しては COVID-19 の流行がパンデミックに移行する直前ではあったが、機会を逃さずに、不織布マスクと 70%エタノール入り清拭紙、同エタノールスプレーを実装し、3 密を避けて実施することとした。そして 8 日に福岡空港（写真 2）からマニラへ移動した。マニラ首都圏滞在中の観察では語学研修の妨げとなりうる火山灰はすでに道路から撤去されていて、わずかにビルの屋上や屋根に薄く残っている程度であった。また、市中で時折見られたマスク姿は火山灰防止と言うよりは COVID-19 対策と考えられた。約 3 日間の同首都圏滞在後、国内線で調査地のレイテ島へ移動した。写真 3、4 は移動中の機中の様子と到着したレイテ島の玄関であるタクロバン空港の当時の様子である。機中では感染予防に関わる注意のアナウンスがあり、乗務員も含め乗員はほぼ全員がマスクをしていた。また、タクロバン空港の入り口では拡声器を持った DOH の職員に額の体温を測られ、2 週間前までの滞在先と健康状態・症状を所定の用紙に記載し出口の警察官へ渡してようやく入れる事となった。そして、一週間滞在したレイテ島を含む東ビサヤ地区では COVID-19 疑い患者が 16 人隔離されていた。しかし、同島を離れる直前の 16 日にウイルス感染が無いことが確認され、全員退院した（現地新聞および TV 報道による）事で、タクロバン市内では多くの市民に安堵の表情がみられた。

今回のフィリピン現地での観察では、語学研修短期留学に関しては、一方でフィリピン国内での学生の COVID-19 感染のリスクは当然ながらある事。そして、日本では感染が拡大し、2 次感染から 3 次感染のリスクがあり、同共和国ではすでに 3 月 22 日以降は日本人含む外国人の入国が実質不可となっている事。他方、同国内の火山活動に関しては、現在タール火山の降灰の影響は首都マニラおよび PHU がある地域では見られなかった。しかし、2 月 15 日現在火山活動の注意レベルはレベル 2 に下げられたが、活動は終わったわけではない事。このような現状からは今回の全学短期留学の中止に関わる本学の判断は極めて的確であったと考えられた。なお、本原稿を書いている 4 月 26 日現在でのフィリピン共和国の COVID-19 患者数は 7294 名で、死者数は 494 名、回復者数は 792 名となっている（<https://www.doh.gov.ph/2019-nCov>）。

中村の本年度現地調査では研究カウンターパートの 1 つである DOH の災害健康管理局 (Health Emergency Management Section : 文献 1) からは時局柄協力は受けられなかったが、同局長の Dr. Lory Labatos-Ruetas およびスタッフ全員に再会し旧交を温めることが出来た。また、他の研究カウンターパートであり、現地で協力いただいた DOH の住血吸虫症防圧研究病院 (Schistosomiasis Control and Research Hospital : 文献 1) の院長の Dr. Lyn R. Velona 及び同病院ベクター調査・研修部門の Ms. Emelda Legaspy と技術スタッフ、本学元准教授の大竹英博先生へ深謝すると同時に、今回の現地調査で新たな住血吸虫感染員の浸淫地の情報が得られた事を付記して、本年度の国際交流に関わる報告を終えたい。



写真 1．福岡空港出国時の様子



写真 2．マニラ市内のサン ラザロ病院感染症病棟



写真 3．レイテ島へ向かう機内での様子



写真 4．レイテ島タクロバン空港の入り口の様子

文献

1. 中村 哲, スーパー台風被災から約 5 年後の復興状況について -フィリピン共和国ビサヤス地区タクロバン市と近郊を再訪して- 看護学統合研究, 21 巻 2 号, 15-22, 2020